

十四歳。

\*

「こっちだ」

階段を駆け上がり、エリックは振り向きざまに階下へ呼びかける。

「待てよ、本当に大丈夫なのか」

見上げるハロルドの眼鏡の奥が不安げに揺れるのを見て、エリックは笑った。

「怖がることないだろ？ 僕んちアトリエなんだから」

「でも君のパパに入るなって言われてるんだろ？」

「そんなこと、なんでもないさ」

ハロルドはエリックのそばまで駆け上がった。

「でも君は、今までそれを守ってきたんだろ？ 君は、今日僕が来たから気が大きくなってるんだ。ちょっと落ち着いて考えろ」

「うるさいな、わかったようなこと言うなよ！」

「わかるさ。君のことなら大抵ね」

そこまで言い切られてしまうと、さすがにエリックも言葉を失う。たしかにこいつは、僕のこと何でもお見通しみたいだ。入学してから今日まで、四六時中顔をつきあわせてきたんだから無理もない。

「……」

「それでも行きたいのかい」

エリックはこくりと頷く。ハロルドが一緒だから、行けると思

ったんだ。

「……わかったよ……。ついてってやるからもう、泣くな」

「……！！ 全然泣いてないだろ！」

怒るエリックから逃げてハロルドが先に階段を上がっていく。

その足を追って、猫がじゃれるようにエリックも続いた。

アトリエの扉は二人の身長の倍くらいの大きさで、取っ手を握りぐっと体重をかけると、重くしむ音とともに、ゆっくりと開いた。

途端、眩しい光がエリックの目を射る。建物の外側に丸くせり出す形のこの部屋の奥は、大きな三面の窓だった。白いカーテンは両端に追いやられて、何者にも遮られず、部屋が光を集めている。白い布をかけられたキャンバスらしきものが、あちらこちらに点在する。床や本棚にまでも、白い布が無造作に覆いかけられている。ベッドとソファ、それらの掛け布も白。キャンバスの足元に置かれた、大きな木箱だけが白を強要されていないようだった。二人は木箱を覗き込んだ。

「画材だね」

ハロルドが呟く。エリックはひざまずいて、箱の中に手を伸ばした。汚れた絵の具がこびりついて、もう二度とはがれなさそうな絵筆とパレット。いくつものガチガチになったチューブと、小さなインク壺のようなもの、パレットナイフが何本か。それらによけて、さらに奥を探ると、なぜか底に貝殻が落ちているのが見えた。

「ずっと使っていないようだね」

立ったままのハロルドは、貝殻に気付いていないようだ。

「ここは母さんが使ってたんだ。母さんは画家だった」

「へえ、画家かい！」

ハロルドは少し感心したように言った。

「母さんが死んでからは、時々父さんが入っていくのを見たけど、父さんは絵なんか描かないし、何をしてたのか知らない」

エリックは貝を拾い上げた。螺旋状に巻かれたそれは、エリックの手にすっぽりと落ち着く大きさで、やっぱり白い。

「あれ、それ……」

ハロルドが眼鏡をずり上げながら、顔を近づけた。

「同じものが、ベッドの下と窓のそばにも落ちてるぞ」

「えっ」

エリックが振り向くと同時に、ハロルドが駆けて行って、ベッドの下からそれを拾い上げてみせた。形も大きさもほぼ同じ、白い巻貝。エリックも窓のそばへ行行って拾うと、本棚と壁の隙間にも、もう一つ見つけた。ハロルドもキャンバスがいくつか重ねられているそばで一つ見つけた。

「ここは、元は海だったのかな」

ハロルドが呟いた。エリックが怪訝にその顔を見やる。

「冗談だよ……でも、まるでそんな状態じゃないか」

「まあ、そうかもね。なあ、競争しようぜ」

「多く拾った方が勝ち？ よし、のった」

少年たちはすっかり図に乗ってこそそこそと家捜しを始める。エリックは、ベッドの上に丸まっている白い布を押しつけた。

「……」

エリックはシートの下から出てきたそれを、少しの間見つめた。

「……ハロルド！」

「ん？ 何かあったか？」

エリックの肩越しに覗き込んだハロルドの眼鏡に、紙の箱と、その周りに広げたままの緑色の包装紙が映った。箱の中には、同じ巻貝が数個と、小さなメッセージカードがあった。エリックが指先でカードをつまみ上げて、開いてみる。

「愛するマリアへ。エリックと一緒に、君のために拾ったんだ……」

「へえ、君が拾ってきたんじゃないか、これ。覚えてないの？」  
「全然……」

エリックは右手にひとつ持っていた、その貝を見つめた。そのとき、巻貝の穴からぼろっと何か、黒い小さいものがこぼれ落ちた。

「わっ、えっ？」

「おっとお！」

転がっていきそうなところをハロルドがとっさに足で止めた。拾い上げると、ハロルドは、はっと顔色を変えた。

「何？ それ……」

差し出したエリックの左手にのせられたそれは、黒い種だった。

\*

とうとう来た。この時が。目の前には白紙の原稿用紙が二枚。

さあ、これから、どうする……？

「とりあえず、夕ご飯にしましょうか」

「あ、はい」

春山さんの甘すぎる誘いに、ころっと落ちる陸子。春山さんの

入れてくる休憩のタイミングは絶妙で、この人は自分のお母さんなんじゃないかと陸子は思う。その代わり、それ以外の時間は休むことを一切許さず、目を光らせているのだが。

「そんなところお母さん……」

「何歌ってるんですか」

「なんでもないです」

目の前には野菜がたっぷり入った鍋焼きうどん。「冷蔵庫のもの使っちゃってもいいですか」と聞かれたけれど、うちの冷蔵庫の余りモノでこんなの良いもんが作れてしまうなんて。陸子は感激に目を細める。

「ああ、私きっと、こういう奥さんがほしかったんだ」

「うわ、やだな、惚れないでくださいよ」

「なんすかその反応」

すっかり陸子は、この新しい担当さんを信頼していた。というか、とても好きになっていった。一日一緒に修羅場を過ごすだけで違うものだ。といっても、この人の人格のお陰も、もちろん大きい。

「……逆にお互い惚れないでいいから、なんかすごく安心するんですよね」

「そういうものですか？」

そう言う春山さんの眼鏡は暖気で曇っている。

「私オカマさんの知り合いもいるんですけど、なんか安心感あるんですよ。あ、私この人の恋愛対象にならないんだ、って思うと」

「……でも、それは女性でも同じじゃ？」

問われて陸子は、まあ、話してもいいか、と思う。なにしろ春山さんの方は、もっと覚悟のいる、カミングアウトをしてくれた

んだから。

「えっと私……、男性も女性も同じなんですよ」

「……あ、ああ。それじゃ、バイセクシャルなんですか？ それで僕の話に抵抗があったのかあ」

「……バイ……っていうよりは、恋、ないんです私」

陸子はちらりと春山さんの反応を窺う。理解できるだろうか。

淋しい人と思われるかもしれない。だめだ眼鏡が曇ってて、反応がわからない。

「あ、なるほど」

春山さんはふつうだった。陸子は少し安心する。

「ずっと気にしてたりも、したんですよ。自分だけいつまでも恋しなくて、子供なのかなとか、私恋なのかな、とか。「恋しない人も世の中にはいる」って何かで読んで、急に楽になったんですよ。それなら、自分で好きになるかどうか、決めちゃえばいいんだって。だから私、人間として好きになれる人だったら、誰とも恋愛できるんですよ。男でも女でも」

安心したらべらべらと言葉が出てきた。でもそんなことも春山さんは気にしないようだった。

「それは前向きですねえ」

「でもですね、性欲つつうんじやないですけど……そばにいと、ふいに性を強く感じる瞬間ってあるじゃないですか。男性なら男性らしさ、女性なら女性らしさ。そのどっちにも、そわそわするようなところがあるんです。落ち着かなくなっちゃうんですよ。そのへんはやっぱり、バイってことでもあるのかな」

「あは、僕の場合は、女性に対してそれがなくなっちゃって悩んでたんですよ」

「それでも、だから私は、落ち着くんですよ。どうしたって男性しか可能性がないっていう自覚が、なまじ普通の女性よりもはっきりあるわけじゃないですか。それでやっとそわそわしなくなるんですよ、私の場合」

「それじゃあ、僕が担当になって一安心ですよな」

春山さんはふふ、と笑った。陸子も笑って続ける。

「でも、実際、どっちの方が難儀なのかなあ。不可抗力で恋に落ちちゃう人と、私みたく恋がない分、誰でも候補になっちゃう人」

「あは、ゲイかバイかじゃないんですか？」

「えへ？」

思わず顔を見合わせると笑いが起きた。陸子にとっては性別よりも「恋をしないこと」の方が大きな問題で、コンプレックスだったのだけれど。でも、それを言うと春山さんにとっては性別の方がコンプレックスなのだから、お互い様だろうか。

「でも「人間として好き」が前提条件にくるんなら、それは良いですね。僕けっこう悪い男にひっかかるんで」

「えっ春山さんが！」

この冷静で抜け目ない人が、恋愛で失敗するタイプだなんて意外である。でもたしかに、だらしない人に尽くすのは好きそうかも。

「じゃあじゃあ、春山さんが几帳面でお母さんみたいなのは、春山さんのジュンターと関係あるんですかね」

「誰がお母さんですか。こんな出来の悪い子を産んだ覚えはありませんよ」

「あはは」

そんなこと言ったら余計お母さんだわ、と思いつつ、今回もやっぱり陸子が立つ前に気付いて、さっと二人分の井をかたす春山さんを見上げる。

「やっぱり普通の男とはちょっと違うのかな、と思う部分はありませんけどね。でもゲイの中にも、ガサツでずぼらで、男っぽいや人もいますよ。女性でも時先生みたいな人いますしね」

「ガサツでずぼらであいすみません」

「まあ、そういう人の世話を焼いては結局、ヒモになられちゃったりするんですよ、僕とかは」

「やっぱり」

「やっぱりって何ですか。お茶飲みますか」

陸子は「飲みます」と即答する。原稿中、陸子が寝そうになり気が散ったりするところで、ちょうど良く春山さんはお茶やコーヒーを持ってきてくれる。陸子の家の急須ももう使い慣れたものである。

「あー、こういうのも「黒い種」なんですかね」

春山さんが後ろ姿で、ふいに呟いた。

「僕みたいな、ソツなく上手く生きていきたいような人間の中にも、「黒い種」があって、変な男にどうしても惹きつけられる……とか」

陸子はほお、と嘆息する。

「それいいですね……その調子でイメージ広げてください」

図に乗った陸子の言葉に春山さんは振り返ってじろりとにらむ。陸子は小さく「すみません」と呟く。

「あの一、春山さんって女性にももてるんじゃないですか」

「もてますよ」

即答するあたりやっぱりこの人いい性格だわ、と思いつつ、続けて陸子は問う。

「やっぱり困るんですか、そういう場合」

「……いや……そうですね……」

珍しく春山さんが言葉を濁らせた。

「知らないで軽い気持ちで寄ってこられると、正直面倒だと思えますけど……うれしかったときもありますよ」

陸子はその先を聞きたげな瞳で見つめるので、春山さんは苦笑いでその視線を避けたけれど、言葉を続ける。

「大学のとき、親元離れたんで僕も安心して。仲間うちではみんな知ってたんですよ、僕がこういう性癖だって。でも、その中の一人に、ずっと僕のこと好きでいてくれた女性がいたんです。僕はあとになって、そのことを知ったんですけど」

「知ってて、ずっと好きでいてくれたんですか」

陸子もなぜか胸がきらきらしてきた。

「はい。そんなふうに、好きになってくれる人がいるっていうだけで、自分を否定しなくていいと思えるじゃないですか。うれしんですよ。その先の人生、ずっとなんとか頑張れそうだと思うくらい」

「わあ」

春山さんは言ってしまったから、少し照れた笑顔をした。陸子はなんだか、春山さんがうらやましいような、その女性がうらやましいような気がした。

陸子にも覚えがある気持ちだ。状況は違うけれど、沼さんが陸子の存在を肯定してくれた。初めて会った十九歳の頃、ちゃんと奥さんがいて大学生の男の子と高校生の女の子がいるのに、陸子

のことも「真ん中の娘だ」と言ってくれた。そうはいっても実の子とは違うなんてことは、よくわかっていた。けれど、そう言うてくれる人がいるだけで、自分がつまらない人間ではないと思えたのだ。

そのことは春山さんには話さないまま、陸子は、思い巡らす。まるでお隣さんのようだ。料理をおすそ分けしたり、プレゼントしたり、時々話し相手になってもらったり。それはお互いの家というテリトリーを守っているうえで成り立っている。きっと春山さんと、こんなに話をしても、お互いの人生の大事なこと、苦しんできたことなど、十分の一も話してはいないのだろう。

「でも本当に、どうしますか。この先のイメージ、広がりそうですか？」

湯飲みを差し出した春山さんの目は、陸子の目をじっと見ている。陸子はそらせずに、眉間にしわを寄せた。

この続き、主人公エリックの掌の上で黒い種はひび割れて、エリックと友人ハロルドは、死んだ母の幻に遭遇する。母の幻は、エリックを自分と同じ場所へ誘おうとする。

そして、陸子の用意したネームその①は次のようである。

エリックは母についていってしまう。ハロルドの制止も、もうエリックの耳には入らない。そしてふいに、現実に戻されたハロルドは、窓から落下するエリックを目撃する。

そしてネームその②。

エリックは母の誘いを拒む。そのとき初めてエリックは、母にいだいていた憎しみに近い気持ちに気付く。父が、エリックに死んだ母の面影を重ねることは、エリックのアイデンティティーを傷つけていた。男の子特有の、父親に認められたい気持ちが

レンマとなって、このとき初めて爆発する。「あなたなんか、最初からいなければよかったんだ」と叫ぶ。と、エリックを抱きしめていた母の腕が、するりと彼の首元をしめつけた。

採用されたのは①の方だった。画的に見せやすいし、展開としても次が気になる。だが陸子は、エリックのいだいているジレンマも、捨てられなかった。陸子の中のエリックは、すでにそれを持ってしまったはずなのだ。しかし、それは愛と表裏一体の憎しみであり、彼がここで母を糾弾するのも、何か違う、とも思えた。

「黒い種」の中から出てくる母親は、やっぱり悪魔なんですか？

春山さんの言葉に、陸子は顔を上げる。うっかり思考ループに陥りそうになっていた。

「悪魔……そうですね……。種の中身って、春山さん見たことありますよね」

突然の陸子の質問に、不思議そうな顔をしながら、春山さんは応える。

「種？ ってなんでもいいんですか？ まあ、いくらかは……豆や穀物なんかもある、種でしょう」

「そうそう、だいたい種の中って、白っぽいような半透明なやつじゃないですか。爪でかりかりやると、割れてくる」

「ああ……そうですね」

「あれは、栄養を蓄えるところらしいんですけど。……「黒い種」の硬い殻がわれて、中の、やわこいのが出てくるの、想像できますか」

陸子のよくわからない質問に、春山さんは表情を変えず見つめ返した。そして静かな目のまま、「はい」と言う。

「あのやわこいののが、悪魔で、母で、コギト・エルゴ・スムで…  
…そういう可能性みたいなもの。……っていうか……そう……う  
ん、上手く言えないんですけど」

「言えなくていいんですよ」

陸子は驚いて春山さんを見る。

「あなたは漫画家なんですから。漫画で描けばいいんです。とに  
かく、種の中から出てくるものを描きましょう」

おお、なんて頼もしいんだ。これはもてるはずだ。と、変な感  
心をしながら、陸子は春山さんの手を取った。

「春山さん！」

「はい」

「下描きなしで描いていいですか！」

……これにはさすがの春山さんの応えも、次のようだった。

「えマジですか？」

\*

エリックの掌の上で、種が芽吹いた。黒い殻に少しずつひびが  
入る。芽は伸びて開き双葉となり、さらにその谷間から茎が伸び  
た。エリックは思わずそれを放り出す。床に落ちてもなおそれは、  
枝葉を伸ばし、太さを増し、床面には根が這って二人を取り囲ん  
だ。

「な、なんだこりゃ、新種のおもちゃかい？」

ハロルドは半分パニックで、ひきつり笑っている。が、エリ  
ックの方を見てその笑みが止まった。

エリックは、首元に冷たい感触を覚えて、右後ろへ振り返った。

母の顔が目の前にあった。

エリックの顔にびったりと向かい合ったそれは、互いの息が唇にかかるほど近く、写真で見たままの顔で微笑んでいる。黒い巻き毛。太い眉にまつげの長い、大きな瞳。どれもエリックとよく似ていた。背丈も同じくらい。まるで双子だ。

エリックの横に立ち、冷たい両腕を首に回して彼女は言った。

「愛しいエリック」

エリックは眩暈がするような、ぬくもりを全身に感じた。引力。抗いがたい、甘い誘惑のようだ。

「一緒に、行きましょう」

エリックは首に回された腕の引き寄せる方へ、導かれ、歩いていく。

「エリック！ 行っちゃだめだ！ 幽霊だ！」

——ああ、ハロルドが何か言ってる……

「戻れ！ エリック……！」

——なんだから、よく聞こえない……

\*

木製の、握り癖がついたペン軸を持ち直す。その先の尖った金属属部から、ぼたりと黒い粒が、左手の甲に落ちた。

「あ」

可笑しいな。また同じところに「黒い種」がついた。

「見て、春山さん」

陸子は居間の方へ振り返る。居間のテーブルでノンブル貼りの作業をしてきているはずなのだが、返事がない。さすがに少し

は寝ることにしたのかな。たぶん、もう、深夜なのだろう。

陸子は、左手の黒い種に、芽を描いた。そうだ、ただひび割れるんじゃない。芽吹くんだ。それから、

「芽が出て、ふくらんで」

葉から茎と、さらさらと、陸子は描いていく。やがて線は手の甲をはみ出して、空中に、縦横無尽に根や茎が伸び始める。

「わあ、これじゃ森になっちゃうな……」

言いながら、陸子の描く手は止まらない。描きながら歩き出す。

いつしか陸子は、鬱蒼と繁るペン描きの森の中に立ちすくんでいた。

ああ、この景色は、この世界は。知っている。ずっと見てきた。

これは、陸子の、もうひとつの真実だ。

ふいに腕の中に何か、温かいものがあるのを感じた。黒い巻き毛の形の良い頭が、腕の中にあっただ。陸子はその首に、腕を回している。彼は、生きている。息遣いを感じる。感動と怖れで陸子は震えた。生きている。彼が、震えに気付いて、顔を上げた。

……エリックの口が、「あ」という形に開いて、大きな動かない瞳が陸子を見つめた。

「母さん……僕は……」

え？ 私は……、陸子は言おうとして、わからなくなる。——私が「母さん」じゃなければ、一体だれがエリックの母親だというのだろう。

父に重ねられることの息苦しさを、今度は陸子がエリックに重ねている。エリックは、陸子の分身だ。陸子が父の分身であるように。こんなリレーが、どこまで続いていくのか。

エリックの、細い指が、陸子の首に絡み付いていた。それに気

付いた瞬間、その親指がのど元をぐっと押さえつけた。陸子は苦しきにもがく。

「……だ……」

エリックが何か言った。

「……断ち切るんだ……」

その言葉に、陸子のはっと動きを止めると、エリックの指がさらに食い込んだ。

「ぐうっ……」

断ち切る、と言った。そうか、エリック自らの手で私を殺せば、この長い糸を切ってしまう。エリックは、私のものじゃなくなるんだ。

誰かが立って、見下ろしている。眼鏡をしている。ハロルドだ。

「エリック……いいのかな。これで、いいのか……?」

「……いいのよ、これで。」

陸子の頭の中で呟いたのは、エリックの母の声だ——そうなぜか、陸子は思った。ハロルドの姿が、白くちかちかと光る視界の中に、消えた。

——先生！ 時先生！ だめです。そのまま死んでちゃだめですよ！

あれ、春山さんの声だ。

——生き返ってください！

そんな無茶苦茶な。

——無茶じゃないですよ。連載の続きがあるんですから。

「あ、やべっ」

陸子は跳ね起きた。

そこはやはりまだ、ペン描きの森の中だった。

「は、春山さん？ いるんですか？」

——先生、ちゃんと生き返りましたね。

春山さんの声だけ聞こえる。

「生き返ったはいいですけど、私自分の描いた漫画から出られなくなっちゃいましたよ」

——大丈夫ですよ。出られます。

「春山さん声だけじゃなくて、姿見せてくださいよ」

——そんなの、僕がどうこうすることじゃないでしょう。先生の漫画なんですから。

「え？」

どういうこと？ 陸子は自分の右手を見た。使い慣れたGペンが、その手の中にある。

——そういうことです。

陸子は眼鏡を描く。

——なんで眼鏡から描くんですか……。

「いいでしょ。印象ですよ印象」

目、鼻、口、輪郭……顔の次は首から下の体。次第に、ペン描きの春山さんが現れる。

「なんだか僕ハロルドに似てませんか？」

「そうですね？」

自分が描いた春山さんが話したり動いたりしているのは、妙な気分で、陸子はまじまじと見てしまう。「あんまり見つめないてください」と笑われてしまった。

「あの……春山さん」

「なんですか」

「私、生き返ってもよかったんでしょか」

「生き返ってもらわなきゃ困ります」

即答する春山さんに、陸子はまだ不安げな表情だ。

「せっかくエリックが殺して断ち切ったのに……」

すると、春山さんはちょっと変な顔をした。

「何言ってるんですか。もうとっくに、エリックはあなたから自立して、好き勝手に動いているじゃないですか。ハロルドだって」

「……そう……ですか？」

はたしてそう言い切れるのだろうか？ 陸子はまだ戸惑っていた。

「そうですね。だから彼ら、もうこんなところにいないじゃないですか」

陸子の森から彼らは、出て行ったらしい。いつかは二人も、彼ら自身の森を作っていくのだろうか。本当に、そんなことが可能なんだろうか……。

「まあいいです、それより、手を出してください」

陸子が右手を差し出すと、「そっちじゃなくて」と、左手を取られた。

「先生、濡れ布巾を」

言われてささっと布巾を描くと、春山さんはそれを取り、陸子の左手の、「黒い種」拭いた。

森が、端からすると消え始める。複雑なレース編みを、糸一本ひっぱって全てほどいていくようで、その様子に陸子は見とれた。森が無くなってあたりが真っ白になってしまうと、春山さんの眼鏡が消えた。「お、イケメン」と思っている間に、目も消えた。

「きゃーっ春山さん！」

「当たり前でしょう。すぐ全部消えますよ」

鼻、口と消え、頭が無くなった。

「きゃーっ」

もう一度叫んだ瞬間、目の前は何も無い真っ白な世界になった。

暖かい空気が頬をかすめるのを感じる。目を開くと、白い紙くすが、まず目に映った。

「あ、起きましたか」

むくりと起き上がると、机の上に湯気の立つお茶が、コトリと音を立てて置かれた。

「は……げんこう……」

「今さっき、バイク便で送りましたよ」

「へ？」

だって、最後の二ページは、どうなったんだっけ？ ぼかんとしている陸子に、春山さんが笑いかける。

「鬼気迫る集中力でしたね……下描きしてないのに、ホワイトも全く使わず。一時はどうなることかと思いましたが、いい漫画になりました。僕が保証します」

なんだか全然実感が沸かない。——私が漫画を描いたんじゃない。描かされていた……って、いうことなんだろうか。陸子はそう思った。

「春山さんのおかげです……」

陸子がまだ寝惚けた表情で言ったので、春山さんは吹き出した。

「リックキーの漫画だからですよ」

「は？」

「実は、デビュー当時からファンなんです、僕。「リックキーの背景を語るスレ」の常駐でしたよ」

陸子は、頭にその意味が伝わった瞬間、照れを通り越してさ——と血の気が引いていくのを感じた。

「きゃー——っ」

居間に駆け出していった、ソファの上でクッションの下にもぐる。

「あははははは」

春山さんは爆笑している。

「いやだああー」

「あははははは、だから言わなかったんですよ」

陸子は半泣きしている。

「じゃあ最後まで隠し通してくださいよ」

「嫌ですよ、僕こういう性格ですから」

うらめしそうに見上げる陸子に、春山さんが歩み寄って、声をかける。

「ちょっと、遅いけど、お昼ご飯食べますか」

居間の壁掛け時計を見ると、二時半を差していた。陸子は「食べます」と言ってソファで体を起こす。ふと左手が、目に映った。

「黒い種」はもうない。

「……ねえねえ春山さん、昨日の夜、もう一度「黒い種」が、おんなじところに付いたんですよ」

あれはきつと、白昼夢か何かだったのだろう。そう思いながらも、陸子は告げる。

「知ってますよ。僕がまた拭いてあげたじゃないですか」

もうバスタをゆで始めている春山さんが、背を向けたまま、そう応えた。

陸子は、意外な気持ちで、その背中を見つめる。